

# 戦前期『育兒雑誌』（復刻版）にみるペダゴジーの諸相

## —＜教育＞言説の社会的配分についての一考察—

高橋 均（早稲田大学大学院）

### I. 研究の目的

「コドモの教養に忠實なる親は書を読み、講話を聞いて育兒に過のない（ママ）ようにせねばなりません。育兒雑誌はこのために生まれた日本で唯一の雑誌であります。」

これは、日本児童協会による『育兒雑誌』（復刻版／1920(大正九)年～1928(昭和三年)の発刊主旨の一部である。本誌は、教育諸制度の拡大や都市部の新中間層の増大などをその社会的背景とし、科学的・啓蒙的な性格を強く打ち出しながら「過のない」育兒のための知識を提供することを目指した。本誌では、学者・研究者から一般の母親に至るまで実に多様な社会的カテゴリーに属する人々がペダゴジー（*pedagogy*）について語っており、＜教育＞言説（*pedagogic discourse*）<sup>1</sup>の社会的配分をみるうえで格好の素材である。本研究では、『育兒雑誌』という言説形態が持つインプリケーションについての理論的考察を行ない、次に、本誌の内容分析を通じ、大正後期から昭和初期という戦前の一時期において、いかなる＜教育＞言説が、いかなる職

業階層に属する人々によって語られたのか、つまり、＜教育＞言説の社会的配分状況についての見取り図を描くことを目的とする。

### II. 「正当言説(*legitimate discourse*)」と「正統言説 (*orthodox discourse*)」

言説は自らが語られるべき「正当化」の基盤を確立することによって、自らが語られることの恣意性という本質を隠蔽することができる。教育システムは、「正当化」された言説を生産・再生産する領域のひとつである。言説の「正当化」の基盤を創り出す教育システムの諸特性として、以下の諸点を指摘できる。すなわち、①言説を生産する知的領域内部の諸実践（知的領域には「自らの教育的知識のための際立った制度的空間をうち立て維持するため」の「内在的な動き」があり、「自らの正当性を特権化された識者の洞察と、識者自らの定義を取り囲む強い諸境界を維持する研究とに依拠させる」(Maton, 2000 pp.161-164) 知的領域独自の実践が展開される)、②教育システム内部の階層秩序（バーンステイン (Bernstein, 2000, pp.36 - 37) は、ヴェーバー (Weber, M.) の宗教社会学から着想を得て、宗教領域における「預言者」「聖職者」「平信徒」というそれぞれのポジション間の関係を、教育領域における「生産者 (producers)」「再生産者 (reproducers)」「獲得者 (acquirers)」という諸ポジション間の階層秩序的関係に相同させる)、③知的領域へのアクセスの制限（近代の複雑化した諸社会においては、「聖」と「世俗」の対比は、

<sup>1</sup> バーンステイン (Bernstein, Basil) によれば、ペダゴジーとは文化伝達における基底的文脈（教師－生徒、医者－患者、ソーシャルワーカー－クライアント、親－子といったコミュニケーション的關係）を指し、それは「何を (what)」「どのように (how)」伝達するか、すなわち、「類別 (classification)」と「枠づけ (framing)」の観点から記述される。本研究においては、そのようなペダゴジーに関する知識を埋め込み具現化する形態として＜教育＞言説を定義する。

教育システムへのより高度な到達から生じる類別的諸原理と形式的に対応する (Atkinson, 1985, p.173)」、である。

こうした諸特性によってうち立てられた「正当言説」は、同時に「正統言説」の地位を巡る象徴的闘争へと参画する。知的領域においては、さまざまな学説が濫立し、そこでは特定の学説が「正統とされること」を巡る象徴的闘争(学会活動、論文の生産、著作の出版など)が繰り返される。象徴的闘争における戦略のひとつである「著作・雑誌の出版」は、言説の正統性をうち立てる言説実践である。「出版領域」という「生産者、批評家、出版者、雑誌から成る小さな回路は、それ自体が聖なるものと認められているがゆえに」、特定の言説を「正統なもの」として人々に認証させる力を持つ。すなわち、「正統言説」は、「すでに正統性をもっている決定機関の承認によって作り出される」(ボスケッティ訳書、1987、14頁)のである。『育兒雑誌』を、このような「正当化—正統化」の過程を経て編制された言説形態のひとつとして位置付けることができる。

### Ⅲ. 実証的検討

本研究では、大正後期から昭和初期における<教育>言説の社会的配分状況を実証的に検討するため、『育兒雑誌』をその分析素材として用いた。本誌に掲載された記事の内からペダゴジーに関する記事をピックアップし(全115件)、「ヴォイス/メッセージコード」の概念を用いて、コード類型別頻度と社会的カテゴリーとの対応関係をみた。コード析出の結果、「類別」・「枠づけ」の中間的・両義的値(±C/±F)もしくは「類別」・「枠づけ」の弱い(-C/-F)

ペダゴジーを指向する傾向を示した。さらに、生産者・再生産者・獲得者別にみても、コード類型別頻度は「類別」・「枠づけ」の中間的・両義的値(±C/±F)もしくは「類別」・「枠づけ」の弱い(-C/-F)ペダゴジーを指向する傾向を示した。以上の結果から、『育兒雑誌』にみる限り、当時の<教育>言説の社会的配分は、社会的カテゴリーにおける階層秩序という規制を超えた配分構造にあったという可能性を指摘できる。また、<教育>言説の伝達・獲得の観点からすれば、『育兒雑誌』は「正統言説」の形態を採りつつ、「類別」・「枠づけ」の中間的・両義的値もしくは弱い「類別」・「枠づけ」のペダゴジーを指向する<教育>言説に正統性を付与し、それを「意識」として社会に配分する、まさに「象徴的統制(symbolic control)」<sup>2</sup>のエージェントとしての役割を果たしていたとみることができる。

#### <引用文献>

- Atkinson, P. 1995, *Language, Structure and Reproduction*, London: Methuen.  
 Bernstein, B. 1990, *Class, Codes and Control*, vol. IV: *The Structuring of Pedagogic Discourse*, Routledge.  
 Bernstein, B. 2000, *Pedagogy, symbolic Control and Identity—Theory, Research and Critique—Revised*, Rowman & Littlefield.  
 Boschetti, A. 1985, *Sartre et les Temps Modernes*, Edition de Minuit. (=石崎晴己訳1987『知識人の覇権—20世紀フランス文化界とサルトル—』新評論社)  
 Maton, K. 2000, "Languages of legitimation: The structuring for intellectual fields of Strategic knowledge claims," in *B.J.S.E.*, Vol. 21, No. 2, CARFAX.

<sup>2</sup> バーンステインによれば、「象徴的統制」とは、所与の権力配分と支配的な文化的諸カテゴリーを中継するコミュニケーションの諸形態を通じて、意識を分化した形態で与え、配分する手段である(Bernstein, 1990, p.134)。